

当顔の系譜

Genealogy of the Bronze Horse Frontlet in Ancient China and Korea

春成秀爾

HARUNARI Hideji

①序 説

②朝鮮の当顔形銅器

③遼西・内蒙古の当顔

④オルドスの当顔

⑤商代の当顔

⑥西周代の当顔

⑦当顔から当顔形銅器へ

[論文要旨]

朝鮮青銅器文化の忠清南道槐亭洞遺跡出土の剣把形銅器は、特異な形態と精巧な鑄造技術によって1967年に発見以来、注目され、その後、類例も加わっている。しかし、その起源と系譜は不明なままであった。このたび筆者は、その直接的な祖型を内蒙古の夏家店上層文化に属する小黑石遺跡出土の当顔に求め、さらにその祖型は西周前期の北京市琉璃河1193号大墓出土の当顔にあることを想定するにいたった。当顔とは、商代に現れる馬の面繫に取りつけて前頭部を飾る青銅製の頭当て（頭飾り）のことである。

しかし、内蒙古の当顔と朝鮮の剣把形銅器すなわち当顔形銅器との型式および製作技術のうえでの隔たりはきわめて大きい。剣把形銅器の出現は朝鮮青銅器文化に細形銅剣が登場するのと同時であるので、それ以前の型式は内蒙古または遼寧地方にまだ埋もれている可能性が大きい。

中国西周の当顔は、前11-10世紀に夏家店上層文化に伝わったあと、内蒙古から遠く朝鮮青銅器文化に前6-5世紀頃に達するまでの間に、馬車が脱落し、さらには乗馬の風習が欠落していった結果、その器種と用途が変化し、儀器化が進行するなど、著しく変容した。しかし、当顔形青銅器が日本列島の弥生文化まで伝わることはなかった。

西周-夏家店上層文化の当顔の意匠に虎を採用し、長期にわたって継承している事実は、この地方で虎が辟邪動物の上位を占めていたこと、王が虎を従えるという意味で虎が各地の王の表徴になっていたことを暗示している。

【キーワード】夏家店上層文化、剣把形銅器、小黑石遺跡、朝鮮青銅器文化、当顔、虎、琉璃河1193号墓